

＜コープ・ノース23＞ 硫黄島で日米豪共同訓練 Cope North 23: Trilateral integration at Iwo Jima strengthens capabilities

March 6, 2023

By Staff Sgt. Ryan Lackey
374th Airlift Wing Public Affairs

「コープ・ノース23」多国間共同訓練の一環で2月21日と22日、横田基地とグアム・アンダーセン空軍基地の米空軍飛行場専門官10名が硫黄島に赴き、航空自衛隊及び豪空軍と技術共有を行った。

「コープ・ノース23」は、米太平洋空軍が主催する多国間共同訓練で、大規模な兵力展開、機敏な戦闘配置、人道支援・災害救援(HA/DR)訓練を通じて、三カ国間の携要領の向上を図る目的で行われる。

今回の訓練全体では、4つの参加国から航空機50機以上と隊員2,000名以上が参加し、隊員は7つの離島に分散して配置された。硫黄島に赴いたチームは、戦闘積卸方法、飛行場調査、資産の防護等に関する情報交換を行った。

アンダーセン空軍基地第36緊急事態対応群副司令官ポール・クーパー中佐は、「専門官たちは、先遣隊調査チームが敵対的環境で採用している技術を伝えるために参加した」と説明し、「人道支援・災害救援(HA/DR)を想定した相互運用性を強化することで、万が一の際、全てのミッションパートナーがより実効的に対処できるようになる」と語った。

戦闘積卸訓練は、第36空輸中隊の隊員が横田のC-130Jスーパーハーキュリーズを硫黄島の飛行場に着陸させた直後に行われ、重量のある貨物を最小限の機材で手動で航空機から安全に降ろす方法がとられた。

アンダーセン空軍基地第36緊急事態対応群航空搬送担当テイラー・ペイト軍曹は、「これを貨物オフロード手法『B』と呼んでいる」と説明し、「到着地に必要な重機がなくても貨物を安全に届けるための幾つかの方法を取り入れている。ここでは、リフトの代わりにサポート(ドラム缶などで簡易的に作る支え)にパレットをスライドさせて降ろす方法を実践して見せた」と話す。

また、航空機や機材等を新たな場所に移動することが求められれば、既存施設の状態や運用能力を確かめに調査チームを派遣する。調査専門官は専門知識とツールを活かして詳細なレポートを作成し、それを戦略計画担当官が効果的に兵力を動員するために使用する。

アンダーセン空軍基地第554レッドホース中隊有事飛行場舗装評価官イェリダ・デル・バレ・ルイズ曹長は、「パートナー部隊に飛行場の損傷の調査方法と詳細な報告書の作成方法を教えた」と述べ、「飛行場の安全性や、離着陸できる航空機を確認するための手段をより多く提供することは、パートナー部隊にとって有益だ」と語った。

「コープ・ノース23」では、飛行場監視技術をテストし、太平洋地域に10カ所ある飛行場から合計1,200回の飛行を行った。硫黄島で派遣チームのセキュリティー訓練を指揮した第36空輸航空団宗教専門官ジョシュア・テイト軍曹は、「敵対的な環境下で統合軍として資産を守る能力を携えるためには、こうした知識を共有することが重要だ」と述べた。

「コープ・ノース」は、四半期毎の二国間演習として1978年に青森県・三沢基地で始まり、1999年にアンダーセン空軍基地に舞台を移した。米太平洋空軍の多国間訓練としては最大規模を誇る。

